脇起し歌仙

枯木の巻

オ

葱買うて枯木の中を帰りけり　蕪村
はるかに仰ぐ尾根の初雪　西村　正人
さやうならそんな言葉が思はれて　児玉　潤
兄が使ったボロボロの辞書　熊谷美智子
蒼き月ビルの谷間を照らしつつ　大山　明彦
屋台のそばをすするむなしさ　船木　明美

ウ

はりいそぐ障子に夕日さし入りて　田中　光子
外人の声近づいてくる　杉浦　忠基
海見ゆる墓地さみだれに洗はれて　三浦　裕子
はじくその手もなぜか汗ばむ　小川　信三
ゆく婦の衣装の袖を手にとりぬ　佐々木厚子
たそがれゆきて白き馬立つ　一戸　淳子
かさこそと小人ささやく月の夜　佐々木尚子
草の実とりて母にとどけむ　神馬　仁美
ベルリンの壁を越えゆく朝寒に　佐々木　章
通勤列車人をはき出す　伊藤こう子
新しき制服の胸に散る桜　小菅　郷子

てふてふが舞ふステージの上　谷村　徳弥

ニオ

春風にボクサー汗の顔さらし　高橋　琢磨
鉄骨を組むスモッグの中　御代　裕子
風呂敷を背中にしょって祖母上京　伊藤　礼子
ブリッコうめぺガッコもうめよ　渡辺　真
四畳半こたつの中の手に触れて　猿田　誠
ガラス戸ごしに合はすくちびる　菅原　貫
自らのひざをいだきて眠りたる　佐々木幹男
三分待てずかたきメン食ふ　矢田部　宏
汗流し父の代理の経を読む　渡辺　淳子
机の傷のなつかしきかな　鈴木　薫
ときぞいま秋を過ぎゆく月夜なる　能登谷雅人
祖母の作りし干し柿の味　瀬戸　智子

ニウ

秋空に飛行機を折る胸はやる　須藤やしほ
酒屋の小僧自転車をとめ　三浦　琉
白い毛の小犬が道をわたるなり　佐藤　真理
ペンキしたたるアトリエの窓　三浦　裕子
水ゆるみ桜前線北へ北へ　高橋　秀晴
掘る手震ふ合格通知　小菅　郷子

脇越し歌仙

「枯木の巻」鑑賞

一関　吉美

1　葱買うて枯木の中を帰りけり　蕪村

夕食のためにネギを買って枯木の中の道をとぼとぼと家路に向かうのであろう。さむざむとした感じだが、枯木とちがってネギには生色がある。この人物の生活は富裕ではないだろうが、貧しいながらもつつましくしみじみとした感じであろう。妻や子は待っているであろうし、ささやかながら楽しい食卓も用意されているにちがいない。カ行音を重ねることによって、わびしさの中に新鮮な心おどりさえとらえることができそうである。

この句を発句に選んだのはイメージが作りやすいであろうと思ったからであった。連句は当季の句を発句とするのが常であるが、秋田では冬も早いのであえて決定したのであった。強引ながらわれわれの連句に蕪村を招待し、仲間になってもらったことになるのである。

2　はるかに仰ぐ尾根の初雪　西村　正人

ネギをさげて枯木の中を帰る人はひとみをあげて尾根の初雪を仰ぐ。生活は低く、しかも思いは高く……といった高雅な風格が思われるのである。

格調の高い脇句を得た。発句をよく味わってちょっと角度を変えて付けたわけである。やや短歌的になったようでもあるが、スッキリと付いたと思う。

選外付句抄

コンロのヤカン白き湯気吹く　こう子
山のかなたに初雪は降る　美智子
老婆が守る冬の駄菓子屋　章
どこの家でもしょっつるかやき　信三

3　さやうならそんな言葉が思はれて　児玉　潤

はるかに尾根を仰ぐ人は若いロマンチストでもあろうか。「さようなら」というそんな別れのことばを自然に思い浮かべているのである。それは何かとの別れというようなハッキリした意識があるわけではあるまい。なんとなく甘く悲しいひびきのある「さようなら」ということばを思うのであろう。

第三は変化の発端にあたる。まことに思いもかけぬ付句であった。脇のややクラシックな句に、あえて新しく若々しい句を付けているところは連句のおもしろさである。もしかしたら、このロマンチストは夏の尾根に登った人で、尾根も冬の間冬に埋もれるのだなと思っているのかもしれない。また、この句には、やや恋の心も動いているようにも思われる。しかし、表六句に恋を入れるのは早すぎるので、なるべく恋にはとらないようにして味わいたいと思う。

選外付句抄

マドロスはパイプ片手に夢思ふ　琢磨
清流に身を投げし後竜となり　章
ふるさとの朝日さしこむ汽車の窓　真理
ペン置きて教壇の声遠く聞く　正子

4　兄が使ったボロボロの辞書　熊谷　美智子

妹（あるいは弟）が、兄の使った辞書を手にして、大学に進んだ兄をはるかに思っているのであろう。ボロボロであることによって兄の勉強ぶりがわかるような気がするし、その兄をなつかしむ心は、またひるがえって進学を予定している自分自身の反省ともなるのである。「さようなら」は、おそらく故郷をはなれるときの兄のことばなのであろう。まさか、兄の辞書がボロボロになったからもうそろそろお払い箱にして新しいのを買おうと言うのではなく、また、受験勉強に疲れ、自信を失って、もう大学なんかヤーメタというわけでは絶対あるまい。

前句から恋への連想を心配したが、うまくさけることができてよかったと思う。付句は、短歌のように五七五七七と前句と直結して考えてはいけないのである。あくまで前句とははなれ独立した詩として考え、二つの詩句によって創作される一つの世界を思わなければならない。このことは、句をつける場合も、鑑賞する場合も同じであろう。

選外付句抄

太陽の下に8五をねらふ　琢磨
幼稚園児が道路横断　明彦
眠気ざましのコーヒー苦く　裕子
和英辞典を枕にごろ寝　こう子
コーラの泡に人生を見る　貫
おみくじ結ぶさるすべりの樹　淳子

5　蒼き月ビルの谷間を照らしつつ　大山　明彦

兄が使った辞書を自分もまた使って、働きながら大学の夜間部に学んでいるのであろうか。あるいはビルのガードマンをしているアルバイトの大学生ででもあろうか。蒼い月の光は美しく、また、近代都市のむなしさをも感じさせるのである。資本主義社会の谷間にたくましく生きようとするこの若者の兄もまたボロボロになるまで辞書を使ってガンバッたのである。ビルの谷間を照らす月は、複雑な感慨をいだく弟に呼え呼えと蒼く澄んでいるのである。

月の定座である。たしかにすばらしい月が出て、場面は都会に移った。

選外付句抄

昼の月水色の空切りぬいて　多賀子
応天門バロックと燃えろ月赤し　一郎

（伴善男の心境）

月明かり夢に牛車の音開けり　尚子
秋の夜月の光が弦はじく　章

6　屋台のそばをすするむなしさ

船木明美

生活に疲れたサラリーマンだろうか。ビルの谷間で屋台のソバをすすっている。蒼い月光を浴びているのだが、この男にはすべては味気ないのである。

ソバは秋の季語である。これで表六句は完成したわけであるが、さて、見渡してみると、それぞれに変化しつつ人間のいろいろな生活がくりひろげられており、いかにも高校三年生らしい若さが痛々しいくらいに出ているように思われる。もっとも、以上は表六句であり、なるべくおだやかに運ぶことになっているので、若さの奔放な活躍は、これに続く裏と名残りの表に期待することになるであろう。また、句形の上から見ると、短句（七七）がいずれも体言止めになっているのは惜しい。付句は、内容も形式も型にはまらないで自由に変化することが望ましいのである。

選外付句抄

グランド去りゆくミスター長嶋　？
遠き故郷の虫の音思ふ　秀暗
熱きイモ持つ手がこそばゆい　宏

踏切過ぐる終電車かな　正子
音なくはじく鳳仙花の実　正巳
台風過ぎて飛行機が飛ぶ　徳幸

7　はりいそぐ障子に夕日さし入りて

田中光子

男は屋台のソバをすすっているが、女は家にあって障子をはっているのである。前句には生活のわびしさがあるが、この句にはなんとなく生活のハリが感じられる。傾いた日の光もパッと明るい。

季語は「障子はる」。

選外付句抄

松虫の鳴く音を込めし銀の鈴　淳子
踊り子に故郷の秋を見せばやな　章
バチンコのはじける音はそぞろ寒む　？
秋の海鵜つくろふ手もかじかみて　尚子

9　外人の声近づいてくる

杉淵忠基

観光寺院の境内にある庵室か、あるいは高級和風料亭の庭園にあるハナレなどの感じであろう。

雑の句。付句の原作は「外人の声下から聞こゆ」であった。おもしろいが、特殊な条件なので次の付け方が困難になりそうなので少し改めた。

選外付句抄

たらひの水でとかす黒髪　裕子
土建屋退陣日本安泰　？
なにがいとしゅうて連句をひねる　宏

鐘の前でにやにや笑ひ

9　海見ゆる墓地さみだれに洗はれて

三浦裕子

横浜の外人墓地、さみだれに清められて明るいエキゾチックな風情がある。

「さみだれ」で夏。原句は「丘の上墓地さみだれに洗はれて」であった。

選外付句抄

夕立ちに洗はれたりし法隆寺　忠基
夏の庭かけひの音が広がりて　真理
雨けむる飛鳥の里の石舞台　こう子
グラバーの蝶はいづこに果てぬらむ郷子

10　はじくその手もなぜか汗ばむ

小川信三

蘭旬の墓地はハイカラなデートの場所としても好適。近づいてくる男の手をはじく女性の手、ちょっと息づまるようなラブシーンのひとこまである。

このあたりで恋の句がはしいということになったが、最初の恋なのでやっぱりとまどいがある。そこで変則だが、蘭に第三の句の付句に応募した中から拾ったのである。作者は「はじく」でバチンコのことを言ったのではないかという説もあったが、「なぜか」などにやはり恋の気持ちがある。「汗」で夏。待望の恋の句となった。

11　ゆく姉の衣装の袖を手にとりぬ

佐々木厚子

姉と妹、それぞれの心のゆらぎを見るようなデリケートな付句である。姉には姉の、妹には妹のそれぞれの恋があるのかもしれない。

恋の句は一句でやめるわけにはいかないのである。

選外付句抄

雑踏に消えてゆく背に涙ぐみ　裕子
バラード聴きてはやる思ひを抑へつつ　正人
おしろいに紅いくちびるくっきりと　るり
単語あていっしょにやった昼休み　忠基

12　たそがれゆきて白き馬立つ

一戸淳子

馬にゆられてゆく古風な嫁入り。たそがれの中に白い馬の準備もととのったのであろう。

選外付句抄

碧の櫛のなどか悲しき　淳子
涙にくもるステンド・グラス　正人
素足になりて谷川わたる　明彦
深青の海夢見る魚　裕子

13　かさこそと小人ささやく月の夜

佐々木尚子

過面は一転してロマンチックなメルヘンの世界である。

秋で月の定座。

選外付句抄

絵筆置き酒をなめつつ月と語らふ　淳子
月かげに輝く銀のシルクのマント　裕子
千鳥足月よ私を照らさざれ　章

月のない夜空を駆ける白夜の騎士　章

14　草の実とりて母にとどけむ

神馬仁美

あえかな夢をはぐくむ少女は母のために草の実をつむのである。

この付句は表の五句目の月の句の選外付句の一つであった。今ここで活かしてみたのである。これも一種の「はらみ句」と言えるかもしれない。

15　ベルリンの壁を越えゆく朝寒に

佐々木章

東と西にわかれて住む母と子であろうか。思い切った小気味のよい付句である。そろそろ大きな変化が期待されるところ。

選外付句抄

頂でピッケルをさす秋空に　徳幸
小走りに木の実のブローチゆらしつつ　真理
朝露に墓前に立つも今日限り　厚子

16　通勤列車人をはき出す

伊藤こう子

映画でも見ているような感じ。多勢の人々、それぞれに感慨を秘めているにちがいないのである。

選外付句抄

鐘の音ひびく朝もやの街　光子
ラジオの声に終戦を知る　正人
平和の鐘の鳴りひびくとき　正人
姉のおもかげ胸にいだいて　真理
爆踊れ遊ぶ広場明るく　裕子

17　新しき制服の胸に散るさくら

小菅郷子

満員の列車から出てきた新入生。さくらのはなびらに祝福される。

明るくはなやかな付句である。季節はもちろん春で、花の定座である。

選外付句抄

縁側に春こぼれたりももの花　修
花曇り酒くみかはす車座の内　尚子
アネモネの花壇横目に歩きだし　真理
わが母校古き桜木花吹雪　光子
独房に紫陽花の香にほひくる　章
海原に花束流すひそやかに　淳子

18　てふてふが舞ふステージの上

谷村徳幸

希望に胸をふくらませている新入生が浮き浮きと見つめる舞台には蝶が舞っている。いかにも春らしい幸福感がいっぱいである。蝶は作り物かもしれないが、そんなことは少しも気にかけないのである。

表六句だけのつもりで始めた連句がどんどんと続いて、初巻を完成したのはうれしい。付句のコツも大体のみこんでくれたらしく、なかなかいい付句がたくさん集まるようになった。

選外付句抄

さい銭を上げおみくじを引く　？
草餅作り仏前に供ふ　郷子
雪どけの川ごうごうと流る　こう子

19 春風にボクサー汗の顔さらし　　高橋琢磨

蝶の舞う華麗なステージもあれば、また、リングに命をかけるボクサーの生活もある。ジムで一汗かいた男は春風に吹かれているのである。

いよいよ二ノ表（名残の表）にはいる。変化の妙を尽くすことが期待される。

選外付句抄

春眠とたれか言ひけむ床の中　こう子
すみれ花路みにじられてなほも咲き　光子
福寿草病の床に咲くを見る　光子
薪能面の白きに火映りて　尚子
洗ひ髪ほのかににほふ春一夜　厚子
のぼり立て麦畑を行く旅芸人　明彦

20 鉄骨を組むスモッグの中　　御代裕子

労働をしながらジムに通う無名のボクサーであろうか。あるいはボクサーの見ている風景なのかもしれない。

付句原作は「スモッグの下」とあった。

選外付句抄

やけに冷たい地下室の壁　明彦
若葉マークを中古車にはる　こう子
夢の島には起重機の音　尚子
丸太の上の土方弁当　尚子
バーゲンセールに人垣できる　裕子
旅するジプシー恋を占ふ　緘
ひたすらいそぐ八時四十分　厚子
ジャングルの中孤独に耐へぬ　章
老人ひとりベンチに坐る　幹男

21 風呂敷を背中にしょって祖母上京　　伊藤礼子

都会で働いている孫を案じて祖母が上京。「おばあちゃん、あれがオレの働いている工事現場だよ。」

選外付句抄

路地裏を刑事気どりで急ぎ足　尚子
ピサの塔重き歴史にかたぶきぬ　郷子
いつの日かノストラダムスの大予言　郷子
モンゴルの星降る夜を思ひけり　厚子
鹿おどしひとたび鳴って後の闇　淳子
黒人吹くトランペットが身をゆする　裕子
炎天下ヤシの実の水は甘露なり　淳子
目と目合ひ内職の手をふと休め　光子

22 ブリッコうめべガッコもうめよ　　渡辺真

祖母のセリフだからカッコをつけたほうがよかったかもしれない。ブリッコはハタハタの卵、ガッコは漬け物のこと。「うめべ」は「うまいだろう」。

選外付句抄

あなたの去ったこの街歩く　正巳
みかんのかをり部屋に広がる　真理
にほとりにもえさ忘れないでね　信三
かさをさし出すどしゃぶりの中　真澄
ジュリーを見て失神しさう　貫
額の上にのせる手ぬぐひ　徳幸

23 四畳半こたつの中の手に触れて　　猿田誠

ブリコハタハダやガッコで一ぱいやりながら……。まさに雪国の風流譚。しかし、また、「こたつの中の手に触れて」ハッとひっこめるような感じもある。そうとすれば、まことに清純な恋ともなるであろう。

選外付句抄

おいおやぢお酒一本つけてくれ　正巳
畜生め女房なんか糞くらへ　正巳
一輪の椿重たし昼下り　明彦
角巻まいて白雪の中湯へ急ぐ　裕子
出かせぎに今年も行ったチャン思ふ　琢磨
山家の中ゐろりに繋ゆるは過ぎにし日　秀晴

24 ガラス戸ごしに合はすくちびる　　菅原貢

古い映画にこのような場面があった。前句の恋がどこまで進むか気をもませたが、これで実しくブラトニックなラブになった。この句、原作は「ガラスの中のあなたの笑顔」であった。どうせなら、もう少し発展させようと思って改作してみたのである。

さて、この付句はどうも大正生まれの好みらしく、若い女生徒たちには不人気であったようである。大体、前句の付句に「サルダくんたらいやらしいわね」という無名氏の投句があったぐらいで、特に俳諧の恋の句についてはなかなか納得がいかない面があったように思われたのである。時がたってから、二ノ裏の折立の応募句の中に「二ノ表なごり惜しき〃あなたのほほゑみ〃」という句を発見した。しかも「〃合はすくちびる〃には反対の声も多いようです。」と付記してあるのである。相当気になっていたのであろう。まあ、しかし、反対は無視することにしたのであった。

選外付句抄

サルダくんたらいやらしいわね　？
〃愛しているよ〃は殺しの文句　？
三下り半は愛のピリオド　？
二人でさが寸下町の部屋　徳幸
みかんに染まる爪を切らせる　徳幸
赤ちゃん預かりますコインロッカー　章
せっせせっせとマフラーを編む　光子
海に叫ぼうあなたの名前　浩一
最後に残るキングとクウィーン　裕子
そりにつけたる鈴の音して　淳子

25 自らのひざまいだきて眠りたる　　佐々木幹男

孤独な青年の姿。眠りからさめてふと自分自身をふり返っているところか。わびしい感じもあるが、また、清純な恋を守り、自己にきびしい清教徒的な男にも思われる。魅力ある付句である。統いた恋の句をサラリと受けて独自の境地をひらいたと言えるであろう。

選外付句抄

教会の階段二人でのぼりゆく　光子

記念日に年代もののワイン飲む　光子
大輪の花火咲かせむ夏の夜　こう子
物言はぬくちびる悲し通夜の女（ひと）　明彦
好きだよとささやくあなた薄情け　？
幼なじみいつまでたっても幼なじみ　章
フィリピンの空まで届けわが思ひ　郷子
ガラス戸についた埃がほろにがい　秀晴
ジーンズの香りただよふ校庭で　正人
目の前にパッと広がるニキビづら　真澄

26 三分待てずかたきメン食ふ　　矢田部宏

アパート暮らしの学生であろうか。殺風景な毎日であるが、わがままな自由を楽しんでいる。

実におもしろい付句である。

選外付句抄

すみにかくれしゴキブリにくし　宏
血潮吹き飛ぶ鉄パイプかな　？
ジュラルミンのたて空しく光る　雅人
ブラックコーヒ全然効かず　るり
霧深き夜に運河を渡る　？
机のペンに朝の光が　礼子
廃墟にひびく孤独のスキャット　真澄
はぐれた友を思ふビバーク　徳幸
友を思ひてシュラフへ入る　徳幸
テーブルの上もう準備よし　薫
質問ない人手を上げなさい　？
湯舟の中の大きなおなら　一郎
向かひ合って父と酒飲む　章
ぬれた舗道にネオンにじんで　裕子
いまだ乾かぬ洗ひ髪かな　光子
入試思ひて気がくるひたる　真理
たてじわの寄る先生の顔　正人
鈴の音響くクリスマス・イブ　正人
夜間トラック国道走る　尚子
ロマンスグレーの老人ひとり　順一
風邪をひいたら恋はおあづけ　真

27 汗流し父の代理の経を読む　　渡辺淳子

寺の息子である。インスタント・ラーメンを食べて、炎天のもと壇家まわりをする。

選外付句抄

通信簿われの目を刺す赤い色　章
あこがれの門をくぐりし時転ぶ　章
雲助さんはぐれ雲見る茶店かな　恵次
夏祭りアルバイトにて山車をひく　厚子
フォード来てやっとやめたな角栄君　？
わか妻のハイとさし出す胃腸薬　礼子
大五郎じっと三分待つのだぞ　弘

28 机の傷のなつかしきかな　　鈴木蕨

仏教大学にでも行っている息子が、夏休みで帰省したのである。経机の傷にワンパク時代の思い出がある。あるいは自分の勉強机に高校生時代の彫刻を発見したのかもしれない。

選外付句抄

心の傷をいやす女（ひと）いる　薫

墨黒々と竜に変身　こう子
小僧の涙小ねずみとなり　こう子
砂の器に涙をそそぐ　章
美人現はれ思はず絶句　正人
アブミで征服オーバーハング　徳幸

29　ときぞいま秋を過ぎゆく月夜なる　能登谷　雅人

机の傷に感傷している。顔をあげると窓の外は月夜である。時は、今まさに刻々と秋という季節を過ぎてゆく月夜なのである。自然と人間を歴史的に把握した付句ということができよう。月の定座。

選外付句抄

眠りたる小さき肩に月あかり　環
山の端のまあるい月を取りたくて　るり
哀れなり月を友とす受験生　正人
月はやく木末の露の地に降りて　淳子
月あかり十五夜のもちかっぱらふ　徳幸
石投げて池にうつりし月こはす　真澄
アルバイト重い足どり照らす月　やしほ
月の照る町にガス燈ともりたる　章
乳色に雲間の月のかがやけり　光子
十月の雨の落柿舎枯れ葉踏む　信三
故郷より来たる秋風部屋を吹き　幹男

30　祖母の作りし干し柿の味　瀬戸　智子

秋まさに深まりゆくとき、しみじみと祖母の作った干し柿の味を思っている。初裏から二ノ表あたりは序破急の「破」にあたっているので大いにあばれることを期待したが、連衆ややとまどったようである。それでも記憶に残るすぐれた付句がいくつかある。

選外付句抄

やぶをころがるころころどんぐり　薫
連句なかばで冬休み来る　宏
連句に入れあげ左遷さるるか　宏
だかれたその手に千歳飴の袋　順子
紙飛行機を秋風にのせ　やしほ
子鹿の背なに紅葉こぼれて　淳子
パリの街路に枯れ葉舞ひ散る　光子
葉ち葉踏みしめ歩く舗道　弘
くるみ割る音胸にしみ入る　真理
栗落ちる音やみの中から　真理
めがねの上にとまるとんぼう　淳子
稲刈りし田のなんと淋しき　聰
机の上の白きコスモス　伸子
広げたその手にもみぢいっぱい　るり
秋の原野を過ぎゆく夜汽車　？

31　秋空に飛行機を折る胸はやる　須藤　やしほ

祖母の味がする干し柿を食べた幼き日と同じような心おどりを覚えつつ、秋空にさそわれたように紙飛行機を折っている。澄んだ空をスッキリと舞うであろう飛行機を思い描くと、紙を折る手も自然とすすみ、ワクワクと胸がおどるのである。

選外付句抄

夫婦こほろぎランプの光にさそはれて　尚子
一夜あけ水道山に小鳥飛ぶ　修
ひぐらしの声を背に受け草を刈る　章
初霜に光放てる菊一輪　明彦
白壁に皆よりかかりひなたぼこ　明彦
秋深くはじめて入れるこたつの火　伸子
バイオリン秋の音色をかなでたる　正人
赤トンボとまったところは禿げ頭　真
図書館に張りつめた空気秋の色　浩一
秋風に風船の飛ぶスタジアム　厚子

32　酒屋の小僧自転車をとめ　三浦　環

明るい空き地で子どもたちが遊んでいる。小僧さんも思わず足をとめて見とれるのである。

選外付句抄

黄昏どきの海なだらかに　尚子
新婚配る足音軽し　厚子
遠くそびゆるバビロンの塔　？
川原に寝ころびツァラストラ読む　明彦
ほほづき鳴らして草笛吹いて　秀晴
なにげなく着く合格通知　？
一触即発中東情勢　？
床にころがる血染めの日本刀　章
小犬と駆ける朝の公園　正人
ブランコこげば地かたぶきぬ　？
虹の向うに林のありぬ　？
そらで誦みつる楊貴妃の詩　光子

すがしき朝に白き球追ふ　裕子
静かに流れる賛美歌の声　礼子

33　白い毛の小犬が道をわたるなり　佐藤　真理

真っ白なかわいい小犬が道をわたるところである。いたわりの気持ちで見守る小僧さん。

原作「わたるまで」を改めた。

選外付句抄

水銀燈こはれたブランコ浮かび出す　るり
日本よ日本まだ守れるぞドンガドン　真
横わたる人みな川面をのぞきこむ　こう子
レンガ館黒い私の夜会服　章
不凍湖に映るは虹の影にして　徳幸
迷ひ子のほほをつたひて涙落つ　徳幸

34　ペンキしたたるアトリエの窓　三浦　裕子

郊外の住宅地などであろうか。道をかわいい小犬がわたり、ペンキの色も新しいアトリエの窓が見える。色彩感覚ゆたかな明るい世界である。

いよいよ連句も完結に近づいた。スッキリと挙げたいものである。

選外付句抄

天下太平あたたかき陽ざし　？
人影見ゆる草原のはて　徳幸
急ぎ足にて切りし下駄の緒　光子
赤毛の人形ごみ箱の中　？
打つ走る守るオレの青春　真

白球とんで足もとに落つ　厚子
柱時計の音響く部屋　明彦
破れぶすまにポスターをはる　明彦
赤と青とのポストが並ぶ　郷子
ランプの下でめくるアルバム　尚子
あなた後悔なさらぬように　章
太宰治の「新樹の言葉」　章
わが子の靴下編む昼下がり　智子
ふとんの下の眼覚し時計　正人
雁木造りに思ひはせつつ　正人

35　水ゆるみ桜前線北へ北へ　高橋　秀晴

ようやく日本列島に春が行きわたろうとしている。大きな科学的な把握のしかたがすばらしい。

「水ゆるみ」はおそらく「水ぬるみ」と同じような感じであろう。冬の間、たとえ凍らなくても、水は冷たく凝縮しているような感じがある。それが春になって次第にゆるんできたというわけであろう。「ぬるむ」ということばとは少しちがった感覚的なつかみ方を「ゆるむ」は伝えているような気がする。どちらにしても、この句は季重ねであることにまちがいないが、この場合は焦点が二つにわかれるような心配はないし、ごく自然にまとまっているように思われるのである。花の定座である。

選外付句抄

桜花ふるはせひびくのろしの音　秀晴

花見ても心なごまず予備校生　秀晴
土手に咲くタンポポつんで帰りつつ　智子
土くれをもたげて芽出す黒水仙　明彦
裏木戸に水仙一輪さしこみぬ　正子
ゐなか道菜の花畑牛が鳴く　るり
咲きそろひ緞たんのごとしチューリップ　郷子
梅の木のもとに敷きたる緋毛せん　厚子
一輪の黄色き花を胸にさす　徳幸
持ちゆかむ香る山吹フランスへ　章

36　握る手震ふ合格通知　小菅　郷子

北国にも桜の花が咲こうとしている。待ちに待った大学の合格通知が届いたのである。大きな感激・・・。

「合格通知」が季語と言えるかどうか自信はないが、「卒業」や「入学」が季語であるから、当然「合格通知」は春の季語として安定していると思われる。ましてこの歌仙に参加した者は全員進学を志しており、現在、大学の受験勉強に没頭しているのである。この歌仙が、このような挙句を得たことはうれしい。全員がこの挙句を実現することを心から期待するものである。

原句は「合格通知握る手震ふ」であったが、キッパリとケリをつけるために体言止めに改めた。

選外付句抄

試験合格電報を打つ　？
春の小川にめだかの学校　聰

光あふれる門今ひらく　裕子
旅先で聞くうぐひすの声　正人
能面打ちの耳に行々子　淳子
受けつがれたる青春の詩　章
春一番の吹きぬける朝　こう子
春うららかに銭湯の煙　るり
土なつかしく春山を行く　秀晴
タックル一発春のぬかるみ　浩一
明けゆく春の日ざしまぶしき　誠
春風に乗る明るい歌声　誠
菜畑にひびく子どもらの声　尚子
縁側いっぱいに春の日はひる　礼子
学校去るとき見送るバッケ　秀輝
街路にかをる沈丁花の垣　淳子
海を遠かして立てる陽炎　修

あとがき

○この歌仙が完成したとき、私は感激して、「諸君はおそらく、今自分たちが何をしたかという自覚はないだろう。歴史に残るような大事業をなしとげたんだよ。日本じゅうで、いや世界じゅうで君たちだけがやったんだよ。」と言った。生徒は口をそろえて、ワハハ……と笑い出した。何のクッタクもないのである。私はしみじみと生徒たちのゆたかな春秋を思い、その無限の可能性をうらやましく思ったのであった。この俳諧興行こそは私自身にとってむしろ空前絶後の大事業であったのである。

○この歌仙は昭和四十九年十月から五十年一月までかかって完成した。表六句だけは古文の授業として作ったが、それ以後は、なるべく授業時間に食い込まないようにして付けたのである。いきおい生徒の休み時間を奪うことになったであろう。生徒たちは休み時間でも大学入試にそなえてそれぞれ勉強している。おそらくヘキエキしながら私に協力してくれたにちがいないのである。ありがたいことである。

○秋田高校三年B組は在籍五十二名である。歌仙三十六句のうち、発句は蕉村の句を借りたから、残りの三十五句を五十二名の生徒に作ってもらうことになる。付句は全員から集めて決定してゆくのだから、一句決定するたびにおびただしい句が反古にされることになる。それを三十五回くり返したのである。しかも、互選はただの一回だけ。（さいわいにしてその結果と私の選は一致したのである。）あとの三十四句は私が独断で選んだ。もちろん私には芭蕉のような指導者としての資格はないが、俳諧の伝統に従い、そういうものだということを教える気持ちもあったのである。

○湧くようなたくさんの句をもとにして一句一句を決定したのであるから、反古となった句もこの歌仙の完成に大きく寄与したと言うべきであろう。とすれば、そのいくつかを収録してお互いの勉強の資料とすることも意味があるであろうし、また、連句進行中の時々の雰囲気をも伝えることができるのではないかと思って〝選外付句抄〟を入れることにしたのである。必ずしもすぐれた句ばかりではないが、それぞれ発表したときにはみんなが相当の関心を示した作品である。もしもこの内のどれかを採用していたとすれば、この歌仙はどのように発展したか予想することもできないのである。無限の発展性をはらみつつ、結局は私の独断によって「枯木の巻」は成立したということになる。この歌仙は生徒たちが作ったのだが、すべての責任は私にある。大方のご教示を切にお願いする次第である。

昭和五十年一月二十三日

一関吉美

脇起し
歌仙　枯木の巻　鑑賞
頒価二〇〇円
昭和五十年九月一日　発行
編著　一関吉美
印刷　ミナトプリント社
発行　秋田連句研究会
（秋田市千秋中島町五の四八　一関吉美方）